宮間利之＆山木幸三郎

ゲスト 川村裕司
（ニューハードの現コンサートマスター）

【みやま・としゆき】 ニューハードのリーダー。一九二一年一〇月三一日、千葉県千葉市生まれ。三九年海軍軍楽隊に入団。「日向」「山城」「長門」「大和」などの戦艦を乗り継ぎ終戦を迎える。戦後すぐジャズ界に入り、アルト・サックス奏者として活躍。五〇年にジャイヴ・エーセスを結成して米軍のクラブなどで演奏。五八年に編成を拡大し、同時にニューハードと改称。以後日本ジャズ界最高のビッグバンドのひとつとして、コンサート、ラジオ、テレビ、レコーディングなどで幅広い活動を継続している。

【やまき・こうざぶろう】 ギター奏者、作・編曲家。一九三一年四月一八日、東京都渋谷区生まれ。いくつかのバンドを経て五一年にグレイシー・ファイヴを結成。五三年にニューハードの前身であるジャイヴ・エーセスに参加。その後にニューハードのメンバーとなり、ギタリストとして活躍する一方、作・編曲にも精力的に取り組む。代表作にニューハードが七二年に吹き込んだ『仁王と鳩』などがある。

■ニューハード結成前夜

――日本のジャズ・ヒストリーを検証する特別企画「証言で綴る日本のジャズ」。本日のお客さまは今年（二〇一四年）で活動歴六四年、一九五〇年以降のジャズ・シーンを現在まで支えていらっしゃるニューハードのリーダー、宮間利之さん。それと嬉しいことに、宮間さんを語る上で欠かせないお二方、ニューハードの作・編曲を担当されているギタリストの山木幸三郎さん、そして現在のコンサートマスターである川村裕司さんもご同席いただいております。こんばんは、よろしくお願いします。

宮間・山木・川村：よろしくお願いします。

――六〇年代の終わりごろからニューハードは積極的にジャズの世界に出てこられました。素晴らしいジャズ作品を次々と出されて、大興奮して聴かせていただいた記憶があります。今日は当時のお話をうかがえればと思います。山木さんはギタリストですけど、ギタリストでオーケストラのアレンジを担当されている方ってあまりいらっしゃらないように思います。そして川村さんは八〇年代になってニューハードに入られました。

川村：そうですね。それでも今年で三二年目になりますから。

――それもすごい。それでは宮間さんにうかがいますが、ニューハードの結成は五〇年ですか？

宮間：そうです。朝鮮戦争のころですね。海軍の軍楽隊を出て復員しまして、戦後間もなくのころは後藤博（tp）とディキシーランダーズなどのバンドに参加していたんです。それから朝鮮戦争になって、やはり自分でもバンドを作りたいと思い、成増のクラブに出演するため結成したのが始まりです。

――それが一〇人編成のジャイヴ・エーセス。小型オーケストラみたいな感じで、米軍キャンプでも演奏されていた。

宮間：バンドを結成するまではディキシーランダーズでの仕事が一番多くて、ほかには奥田宗宏とブルー・スカイ・オーケストラなどでも演奏して、お勉強をさせてもらっていました。当時は一〇人編成くらいのサイズが流行っていて、それで自分もそのスタイルでバンドを組んでみたんです。

――ぼくが知っている宮間さんは指揮者になられていて、楽器は演奏していませんでした。でも、当時はクラリネットやアルト・サックスを演奏されていたとか。

宮間：もともとは「エスクラ」（キーがEフラットのクラリネット）という、音域の高いクラリネットを吹いていたんですが、あるときからサキソフォンを吹こうと決めました。それは楽器編成上の理由からで、「ジョンソン・エアベース」の「NCOクラブ」（注1）で演奏しているころまでは無我夢中で楽器を吹いていました。その「ジョンソン・エアベース」にいたころに、高見弘（as）君（注2）や山木幸三郎君が入ってきて、一緒にやることになります。高見君とぼくは同じアルト・サックスなので、所沢のわたしの家によく遊びに来たりして、いろいろな話をしていたんです。そのうちに山木君と高見君のやっていたバンド（グレイシー・ファイヴ）がうまくいかなくなって……。それで高見君が「うちに入れてもらえないだろうか？」という話になって、そのときに「宮間さん、山ちんも入れてくれませんか？」と、そういう話でね。「おお、そりゃいいな」ということで、ふたりが入ってきたんです。しばらく一緒にやっている間に山木君と高見君がやろうとしている感じもわかってきました。ふたりから「やりたいことがある」という話も聞いて、

（注1）「ジョンソン・エアベース（ジョンソン基地）」は現在の入間基地。駐留軍兵士用のクラブには3種類あり、1番高いクラスが「Officer's Club＝将校用クラブ」、2番目が「NCO Club（Non-Commissioned Officer's Club）＝下士官用クラブ」、1番下が「EM/EW Club（Enlisted Men/Enlisted Women's Club）＝兵士用クラブ」。

（注2）高見弘（as 1932〜88年）大学中退後にジャイヴ・エーセスに参加。50年代から60年代にかけては多数の作・編曲も提供。71年にフリーとなって以後もテレビ出演のほか、編曲も精力的に行なった。

彼らがアレンジをするようになったんです。

——山木さんはその時点でどんな演奏をしていたんですか？

山木：そのころはまだ楽譜なんて売ってませんし、どこにもありません。ぼくらが加わる前ですが、宮間さんたちのバンドは軍からもらった譜面を使って演奏していたんです。それでダンス音楽をやっていらした。ぼくらはコンボで土曜日と日曜日のショウでキャンプに入って、やっていたのはモダン・ジャズ。アドリブなんかを入れてやってるものですから、兵隊さんたちが喜んでね。だけどさっき宮間さんが仰ったように、ぼくらのバンドがみんな宮間さんのところに入っちゃった。それもあって、宮間さんのバンドが今度はモダンな演奏をするようになったんです。

■東京進出を機にニューハードが誕生

——ジャイヴ・エーセスからニューハードに変わったのはジョンソン基地の仕事を辞めたあとですか？

山木：そのころからだんだん日本も復興してきたんで、ダンスホールとかキャバレーとかがあちこちにできました。それで宮間さんが、「そろそろ軍の仕事じゃなくて、そういう場所へ出よう」というんで、ニューハード（注3）に名前を変えて再出発したんです。

——宮間さん、「ニューハード」という名前はウディ・ハーマンの「ファースト・ハード」や「セカンド・ハード」と関係があるんですか？

宮間：そうなんです。ウディ・ハーマンのモダンなサウンドにあやかろうということで、向こうが「ファースト」とか「セカンド」を名乗っているなら、こちらは「ニュー」でいこうと。ニューハードというバンド名でいえば、東大にイーストハードというのがありましたね。あと、沖縄にもニューハードというバンドがあったんです（笑）。

——バンド名を変えて、編成もフルバンドになった。それでモダンなビッグバンド・サウンドを追求したのがニューハードですね。

（注3）65年夏ごろまでは「ニューハード・オーケストラ」が正式名称。

宮間：東京に出てすぐのときに、松本伸（ts）さん（注4）の一番オクテットでやっていたジミー荒木（as p）さん、あの方からモダン・ジャズの奏法をいくつか教わったんです。それでモダン・ジャズのことを知ったんです。そのときのことはいまでも忘れません。

それで東京に出るならなんとかしようと思って、楽器もコンステレーション（コーン社製の管楽器）というのがありますね、あれでブラスを全部揃えたりね。ほかにも、福田一郎（注5）さん、いソノてルヲさん、大橋巨泉さんのお三方を、別々でしたがジョンソン基地のクラブに呼んで、うちのバンドを聴いてもらったり、新宿に行って夜明けまで話したりしました。いソノさんからは、「このバンドは山木君と高見君のアレンジでいいんじゃないの？　できればディジー・ガレスピー（tp）あたりのバンドのアレンジをやってください」といわれました。そういうこともあって、山木君と高見君は頑張ったんですよねえ。

——それで東京で演奏するようになります。今日は宮間さんから貴重なレコードもお借りしているんですが、その直後の録音で『ジャズ・アット・ザ・ビデオホール』（ビクター）（注6）という一〇インチのLP。

宮間：これはわたしどもが東京に出た最初のころの演奏です。あの時代はメンバーみんなに「さあ、やってやるぞ」という気持ちが強くあって、とても張り切っていました。懐かしいですね。

——これがニューハードの初レコーディングになりました。それでは、当時定期的に開催されていた「ジャズ・アット・ザ・ビデオ」というコンサートの実況録音盤から〈我らの仲間〉のさわりだけ聴かせてください。

♪〈我らの仲間〉～『ジャズ・アット・ザ・ビデオホール』（ビクター）

——それで曲が流れている間に山木さんにお聞きしたら、ぜんぜん覚えてないと仰る（笑）。おそらく山木さんのアレンジだと思うんですが、すでにモダンな響きをしていますね。

山木：ありがとうございます。

（注4）松本伸（ts 1908年生まれ）大阪で演奏活動を始め、30年に上京。32年からコロムビア・ジャズ・バンドに参加。戦後はいち早くニュー・バシフック・バンドを結成してラジオに進出。その後は日本初のビバップ・コンボと呼ばれるイチバン・オクテットを旗揚げして活躍した。

（注5）福田一郎（音楽評論家 1925～2003年）50年代からジャズ評論を執筆し、60年代以降は日本を代表するロックやポピュラー音楽の評論家として活躍した。

（注6）58年9月6日と10月4日に開催された「第37回＆第38回ビデオ・ジャズ・リサイタル月例コンサート」の実況録音盤で、10インチLPに4グループ9曲を収録。メンバー＝宮間利之とニューハード他58年9月6日 東京有楽町「ビデオホール」でライヴ録音

——五八年当時、日本のビッグバンドで新しいことをやっているところはほかにあったんですか？

山木：いや、まだなかったですね。なんというんでしょうか。こういうリフ物みたいなジャズはどこもやっていませんでした。

——ニューハードは新しいことを率先してやるオーケストラだった。

山木：そうです。そのことは意識していました。

——資料によりますと、「ジャズ・アット・ザ・ビデオ」という定例コンサートですが、五八年の時点で山木幸三郎作・編曲の〈海燕〉や〈晩夏〉といった作品が演奏された、とあります。これらはのちの〈ふり袖は泣く〉といった名曲に繋がる曲といわれていますが、当時から日本的なテーマでジャズの曲を書かれていたんですか？

山木：ジャズは題材をいろんなところから選べるので、どうせなら日本人が作った日本のジャズというものがどこまでできるか、そう考えてオリジナルを作ろうとしたんですね。ジャズにこだわる方々にそれをどう聴いていただけるか。となれば、どういう曲をどういう形でやるか、そこが一番の問題でした。ジャズだったら一二小節のブルースとか循環コードのＡＡＢＡ形式とかがあります。これでいかなかったら聴いているひとにわかってもらえない。そう思ったんです。だからジャズならではの形をまず頭に入れて、それを基に曲を作ってきました。

——形式はジャズで、そこに山木さんならではの作風を表現したと。

山木：そうあればいいと思って、これまでずっとやってきています。

——この五八年の「ビデオホール」コンサート。このときにジミー荒木さんがフラリとお見えになったとか。

宮間：そうです、リハーサルをやっているときでした。

——ジミー荒木さんは、アメリカの駐留軍兵士として戦後の日本に来て、多くの日本人ミュージシャンと共演されている。五八年ということは、一度アメリカに戻られて、日本文学を勉強するために再来日したときですね。

宮間：これがジミーさんとの出会いです。向こうから自己紹介をされてね。ジミーさんにはビバップの手ほどきをしていただきました。楽器は使わないで口移しでフレーズを教えてくれるんです。ジャズが深く理解できたということに関しては本当にお世話になったと思っています。それから、先ほどの曲のように山木君が書く日本的なメロディも、ジミーさんが歌うとジャズ風に聴こえるんですよ。ですから、ジミーさんにいろいろなことを教わりまして、それを自分なりに解釈してメンバーに伝える、ということをやっていました。

■ジャズ以外の舞台でも八面六臂の活躍

——六〇年代に入りますと、ラジオとかテレビへの出演が増えます。テレビの時代が来て、歌番組があるとニューハード、あるいはシャープス＆フラッツが二大ビッグバンドみたいな形で競っていました。

宮間：ジャズを演奏するオーケストラであってもそれだけでは仕事が足りません。オーケストラを運営するにはかなりの費用がかかります。たまたま放送の仕事が入ってきたり、レコーディングで歌謡曲の伴奏するような仕事も入ってきました。わたしはジャズのオーケストラであってもジャズだけしか演奏できないようではダメだと考えているんです。それで、わたしどもに「演奏をしてください」というお話があれば、喜んでやらせていただきました。

——ジャズをやるためにそれ以外の音楽も演奏したということでしょうが、それ以外の音楽をやることも嫌ではなかった。

宮間：ジャズだけでは生活ができないことも理由ですが、わたしはジャズも好きだしクラシックも好きで、日本の歌謡曲も嫌いじゃなかった。仕事をしなけりゃ好きなジャズはできない。そういうことから、ニューハードではジャズ以外の音楽もやっていこうと考えました。それで北島三郎さんたちと一緒にやったり、ニューハードとコンサートやリサイタルをやりたいというひと、たとえばロックの平尾昌晃君とかね、そういう気持ちを持っているひととは喜んで共演させていただいたんです。そうやって仕事もたくさんやるようになりました。

——当時はそうとう忙しかったでしょう。
宮間：ひと月で五〇何回とかね。それぐらいやったこともあります。もちろん二本録り、三本録りも入れて。
——ぼくの世代はほとんどみんな観ていたと思いますけど、子供のころに毎週やっていた『シャボン玉ホリデー』（注7）。あとで知りましたが、これも音楽はニューハードで、ザ・ピーナッツとかのバックをやられていた。
宮間：そうです。ぼくたちはモダン・ジャズをやってるけど、日本の音楽も好きだから、音楽には違いないしということで、そういうお仕事も喜んでやらせてもらいました。
——レコーディングにしても、もちろんジャズのアルバムはあるけれど、スクリーン・ミュージックのアルバムなど、いろいろなものを出されています。しかもその数が半端じゃない。
宮間：あのあたりは、山木君と高見君が大車輪でアレンジしたんですよ。
山木：たしかに頑張りましたね。わたしもジャズ以外の音楽をアレンジするのが嫌いじゃなかったから、たいへんではあったけれどニューハードがやったらどんなサウンドになるのか、そのことを楽しみながら仕事をしていました。
——そうでしたか。それで話は変わりますが、『宮間利之とニューハード／スクリーン・ヒット・パレード』（東芝）（注8）という、渡辺貞夫（as）さんと宮沢昭（ts）さんをフィーチャーしたアルバムが残っています。六一年ですから、渡辺貞夫さんがアメリカに留学する直前の録音ですが、その中から当時ヒットした映画音楽の〈ナバロンの要塞〉を聴きたいと思います。

♪〈ナバロンの要塞〉～『宮間利之とニューハード／スクリーン・ヒット・パレード』（東芝）

——山木さんはアレンジャーとしても大活躍ですが、こうしたポピュラー・ミュージックでもジャズのフォーマットを用いてアレンジされていたんですね。

（注7）日本テレビで61年6月4日から72年10月1日まで毎週日曜日、76年10月9日から77年3月26日まで毎週土曜日に放送されたバラエティ番組。

（注8）〈ナバロンの要塞〉〈栄光への脱出〉といった映画のヒット曲を収録。大きく注目されていた渡辺貞夫も曲によって参加している。メンバー＝宮間利之とニューハード 渡辺貞夫（as fl）宮沢昭（ts fl）三保敬太郎 山木幸三郎 前田憲男 八城一夫（arr）61年 東京で録音

山木：そうです。まずはリズムのパターンをいろいろと考えて、それから「この曲はこういうリズムでやったら面白いかな？」とやるわけです。そのリズムがメロディにどれだけフィットするか、それで編曲のできに差がつくんじゃないでしょうか。
——先ほど宮間さんにもうかがいましたが、テレビでもラジオでも大忙しで、それでレコーディングもたくさんあって、かなりきつかったでしょう。
山木：そうですけど、やはり、好きなことですから。本人はけっこう楽しんでやっていました。
——でもオーケストラのアレンジとなれば、たとえば一五～一六人いたらその人数分の譜面を用意しなければならない。一曲あたりの書く量が多いじゃないですか？
山木：多かったです。でも、あのころは若かったからまったく苦にならなかったです。たいへんはたいへんだったけれど、そのときはそう感じなかったように思います。
——ところで、ニューハードは弘田三枝子（注9）さんの伴奏を多くやられています。
宮間：彼女はすごい才能の持ち主で、あの若さなのにこちらがいつも刺激を受けていました。
——それでは弘田三枝子さんがデビューした直後の吹き込みで、一四～一五歳のときだと思いますが、〈かっこいい彼氏〉を聴いてみたましょう。

♪〈かっこいい彼氏〉弘田三枝子（東芝シングル盤）

——こういう感じの曲ですが、バックにオーケストレーションがしっかりあるんですね。ロックのビートでも、ニューハードが演奏していたと思うとたいへん味わい深く聴けます。こういう曲も山木さんがアレンジをされていたんですか？　それとも他のアレンジャーを立てたんでしょうか？
山木：自分たちでアレンジしていましたね。このころはアメリカから大量にポピュラー・ミュージックやヒット曲が日本に入ってきたので、それをオーケストラの伴奏でどうやるかが、自分としては面白かったで

（注9）弘田三枝子（vo 1947年～）61年に〈子供ぢゃないの〉でデビュー。歌唱力とパンチの効いた歌声で、「ポップスの女王」といわれた。

す。ジャズのことはあまり意識しないで、シンガーの伴奏、それもポップスの伴奏であることに気持ちを集中させてアレンジしていたことを覚えています。

——なかなか出番がなくて申しわけなかったんですが、川村さんは現在のコンサートマスターでいらっしゃいます。いまもジャズだけじゃなくて、こういうポピュラーな曲も含めた幅広い演奏をされているんですか？

川村：えーとですね、かつての忙しかった時代とは違い、いまははっきりいいましてけっこう苦難の時代で、ビッグバンドの需要は仕事としてはありません。ですから、自分たちで自主的にライヴ活動をすることが多いです。

——山木さんや高見さんが残したアレンジはまだあるんですか？

川村：はい。いまは年に二、三回の自主コンサートをして、そこで演奏しています。この間、びっくりしたんですが、再発されたニューハードのアルバム『仁王と鳩』（日本コロムビア）とか『土の音』（同）とか……。

——七〇年代の作品ですね。

川村：それを聴いて本当に衝撃を受けました。そしていま、そのときよりもっと古い録音を二～三曲聴かせていただきましたが、それらもやはりニューハードの音がしてるんですね。七〇年代のアルバムを聴いてもニューハードの音がするし、初期の演奏からもニューハードじゃなければ出せない音がしている。宮間さんや山木さんをはじめ、これまで作ってきた音のノリといいますか、そこにニューハードらしさがあって、とても感激しています。

——そして、川村さんがその伝統を引き継いでいる。

川村：そうありたいですね。メンバーにも高齢の方から（笑）、若いひとまでまんべんなくいますから、若いひとにはニューハードの歴史を身体で覚えてほしいと思っています。あと残念なんですが、昔のレコーディングではアレンジ譜とかが買い取りだったと聞きました。山木さん、そうなんですか？

山木：昔はね、レコーディングすると譜面はそのレコード会社に権利があったんですよ。その時代にはコピーする機械もないので、手元に残ってない譜面がずいぶんあります。

川村：探しても譜面がなくて。

山木：昔はみんなそうだったんです。歌のバックをアレンジしても、みんなレコード会社が持っていっちゃう。

——ほかのバンドが伴奏するときにその譜面が必要だったんでしょうね。

川村：ですからバンドが持っている昔の譜面はたいへん貴重なので、なるべくその音を再現するように演奏しています。

——そうですか。では、ここでもう一曲聴きたいと思います。今度は〈ゴールド・フィンガー〉。これも映画音楽ですが、『宮間利之とニューハード／ニューハード・モダン・ジューク・ボックス』（日本コロムビア）（注10）の中に入っています。当時はこの手のポピュラー・ミュージックをジャズ化してアルバムを作ることが多かったんですか？

山木：そうですね。ニューハードがやったらどうなるか？　というので、けっこうレコード会社から注文が来ました。グループ・サウンズの曲をやったものもありますしね。ジャズ・ファン向けというより、一般のひと向けの企画です。ビッグバンドの迫力あるサウンドでポピュラー・ミュージックが聴きたいという需要があったんじゃないでしょうか？　かなりたくさんアルバムを吹き込んだことを考えると、当時はそういう時代だったんですね。

——宮間さんは、先ほど「歌謡曲でもなんでも好きだから」と仰っていましたが、流行した曲を自分のオーケストラで自分たちのサウンドで表現するのは楽しかったですか？

宮間：はい。それと同時に、東京に出たときに、日本でのナンバー・ワンになりたいという思いがありまして、山木君と高見君、そして佐藤允彦（p）さんや前田憲男（p）さん、そういうひとたちの力をもらいながら、レコード会社に働きかけてね。だからそういう曲をやるときは、やる気満々で挑戦していました。

（注10）〈十番街の殺人〉〈ハロー・ドゥリー〉など、当時のヒット曲を取り上げたイージー・リスニング風ジャズ・アルバム。編曲を担当したのは山木と高見弘。メンバー＝宮間利之とニューハード　65年　東京で録音

——それでは、〈ゴールド・フィンガー〉を聴かせてください。

♪〈ゴールド・フィンガー〉～『宮間利之とニューハード／ニューハード・モダン・ジューク・ボックス』（日本コロムビア）

■ジャズの世界でも真価を発揮

——演奏を聴きながら、川村さんと山木さんが「いい音してるよね」とレコーディングのお話をされていました。当時の日本のレコーディング技術はアメリカより遅れていたといわれていますが、こうやって聴くとダイナミック・レンジとかがすごいですね。

山木：そのころのミキサーさんはみんなすごかったですよ。でも、いいミキサーさんはみんなカラヤンが連れて行っちゃったり（笑）、クインシー・ジョーンズが連れて行っちゃったりね。ぼくの友だちにもずいぶんミキサーがいましたけど、みんな外国に連れて行かれちゃった。

——日本の技術はすごかった。

山木：すごいですよ、これは。

——この時代ですから、アナログ録音ですけど、いま聴いてもいい音がしてますね。

山木：竿の先にマイクをつけて録音していた時代ですからね。

——試行錯誤もあって苦労されて、いい音が残せた。

川村：全体の音が録れてますね。

山木：そう。

川村：いまはひとりひとりにマイクがついていますから、それをあとからミックスしちゃう。

——だから却って不自然になって……。

川村：空気の音がしないんですよ。マイクの数は少なくて、ワッとその場のサウンドを録ったほうがナチュラルな響きになると思います。

——それではもう一曲、今度は渡辺貞夫さんがバークリー音楽院留学から戻られてきたときに共演されたアルバム『家路／渡辺貞夫モダン・ジャズ・アルバム』（日本コロムビア）（注11）からタイトル・トラックを聴いて、またお話をうかがいたいと思います。

♪〈家路〉～『家路／渡辺貞夫モダン・ジャズ・アルバム』（日本コロムビア）

——お聴きいただいた〈家路〉ですが、渡辺貞夫さんがアメリカから戻られて、割りと早い時期に録音されたものです。貞夫さんの当時の印象など、覚えていらっしゃいますか？

宮間：渡辺貞夫さんとはアメリカに行く前から何度も一緒に演奏していましたが、戻られてひと回りもふた回りも大きくなった印象があります。音楽もそうですが、人間的にも立派になられて、それでいて奢ったところが少しもない。このときのことだったかは覚えていませんが、音楽に対して実に誠実に向き合ってるな、と思ったことがあります。それと、この演奏を聴いていると、羽鳥幸次（注12）というトランペッターのことが思い出されましてね。長いことうちにいて、これからってときに亡くなってしまった。日本のジャズ界にとっても実に残念なことだと思っているんです。ビッグバンドにおける羽鳥君のトランペットは本当によかった。質問とズレてしまってすみません。

——いえいえとんでもないです。これは山木さんのアレンジですね。

山木：はい。渡辺さんは日本に帰ってきてすぐにぼくの家に遊びに来て、「曲を書いてくれ」と頼んできたんですよ。

——貞夫さんからのリクエストだったんですか。

山木：ええ。「その代わり、バークリーで習ったことを教えてくれ」といって、彼の家に三ヶ月通いました。ぼくはまったくの独学だったもんですから。そしたら彼に、「山木さん、好きなように書けばいいの。

（注11）渡辺貞夫が留学から戻った約5ヶ月後に吹き込まれたアルバム。バックはニュー・ハードと八城一夫（p）のトリオが務めている。メンバー＝渡辺貞夫（as fl）宮間利之とニューハード 八城一夫トリオ 山木幸三郎 前田憲男 渡辺貞夫 高見弘（arr）66年3月 東京で録音

（注12）羽鳥幸次（tp 1933～2006年）ゴールデン・クヴァーノ、花田晶と東京クール・オーケストラなどを経て、57年にジャイヴ・エーセスに参加。ニューハードには73年4月まで在籍し、退団後は石川晶（ds）が結成したカウント・バッファローズなどで演奏。

たしかにバークリーでもひと通り教わったけど、あとは好きなように書けっていわれました。山木さんはすでにそうやられているから、教えることはなにもない」といわれたんですけどね（笑）。でも、とにかく三ヶ月通って、彼からおいしいところを全部教わりました（笑）。

——得しちゃいましたね（笑）。それで貞夫さんがバークリーから戻られて、その後に佐藤允彦さんがバークリーに行く。佐藤さんから聞いたところでは、貞夫さんが「バークリーに行け」ってしつこく勧めてくれたということでした。そして佐藤さんが戻られてから、佐藤さんとニューハードの関係がたくさん生まれます。

■気鋭の作・編曲家と組んで

——画期的なアルバムだなとびっくりしたのが『宮間利之とニューハード／パースペクティヴ』（日本コロムビア）（注13）です。佐藤さんがバークリーから戻られて、ニューハードと共演した最初のアルバムだと思います。佐藤さんと宮間さんとの出会いはどういう形だったんでしょうか？

宮間：彼がアメリカに行く前のことですが、青山学院の横にスタジオがありまして、そこでドラムの石川晶（ds）君と佐藤允彦さんと、仕事かなにかの関係で一緒にやったことがあったんです。そのときに、わたしが「学校から戻ったら一緒になにかやってくださいよ」とお願いしておいたんです。それで帰国したときに、わたしのところにいたマネージャーの白石君が、「佐藤さんというひとから仕事の依頼が来てたんですが」というから、「それは、向こうからやりたいといってきたら、こちらはすぐにでも一緒にやろうと思っていたひとなんだよ。ぜひ繋げてくれ」と。それで繋がりができたんです。

——とにかくこの『パースペクティヴ』にはびっくりしました。ちょっと聴いてみましょう。

♪〈パースペクティヴ〉～『宮間利之とニューハード／パースペクティヴ』（日本コロムビア）

（注13）佐藤允彦（p）に作・編曲を依頼して完成したのがタイトル・トラック。斬新な音楽性は世界的な視野で見ても当時のジャズ・オーケストラの最高水準をいくもの。メンバーは宮間利之とニューハード山木幸三郎 高見弘 前田憲男 佐藤允彦（arr）69年3月6日、13日 東京で録音

——お聴きいただいたアルバムは『スイングジャーナル』で六九年度の「ジャズ・ディスク大賞／特別企画賞」を受賞しています。

宮間：そうでしたね。佐藤君が頑張ってくれて素晴らしい曲を持ってきてくれたんです。そのころはニューハードにもたくさん実力者が顔を揃えていたので、うちでもこれからはもっと新しいジャズをやっていこうと思っていました。ですから、佐藤さんとこういう形で出会えたのはニューハードにとってとてもよいことでした。

山木：それまでにも前田憲男さんなんかにアレンジを依頼することがよくあって、そういうひとたちが書いてくるスコアにぼくたちも刺激を受けていたんです。このときの佐藤さんもそうですけど、ニューハードのいいところは常に外部から刺激を受けて、それに触発されてきたことだと思います。

——この時期には渋谷の「オスカー」というジャズ喫茶にもときどき出ていました。目の前でビッグバンドの迫力ある演奏を聴いて、「素晴らしいな」と思った記憶がいっぱいあります。

宮間：あれはアルト・サックスの土岐英史（注14）君が入ってきたころだね。わたしたちにとっても、小さなライヴ・ハウスで演奏するのは刺激だったですね。いつもはコンサート・ホールみたいな大きなところで主にシンガーの伴奏ですから、それはそれで仕事として満足していましたけれど、やっぱり自分たちの演奏でステージをやってみたい。それもジャズ・ファンの前で、という気持ちがありました。

——ライヴですからソロも延々と吹いて、本当に面白かったです。「オスカー」のほかには銀座の「ジャンク」にも出られていました。ジャズ喫茶やライヴ・ハウスに出る有名ビッグバンドはまったくといっていいほどなかったから、ニューハードはほかのオーケストラと比べて別格の存在でした。

山木：耳の肥えたひとたちの前で演奏しますから、こちらも緊張してやってました。そういうのがまた勉強になるわけです。自分たちにとっても必要であり大切な場がジャズ喫茶での演奏だったと思っています。

——だからシリアスなファンの心をとらえるものになり、日本を代表するビッグバンドになっていくわけです。それからいまの『パースペクティヴ』にはもうひとつぼくの大好きな曲がありまして、山木幸三郎さん

（注14）土岐英史（as 1950年～）大学中退後、鈴木勲（b）のグループに参加。71年に宮間利之とニューハードに入団。その後は日野皓正（tp）のグループを経て、85年には山岸潤史（g）、続木徹（key）らとチキンシャックを結成。山下達郎のバッキング・メンバーとしても活躍している。なお歌手の土岐麻子は長女。

の作・編曲で〈ふり袖は泣く〉。これをさわりだけで申しわけないんですが、聴かせてください。

♪〈ふり袖は泣く〉～『宮間利之とニューハード／パースペクティヴ』（日本コロムビア）

――先ほど山木さんが仰っていたように、これも日本の情緒とジャズのフォームがうまく絡み合った曲になっています。

山木：これはブルースで書いたんですね

――だから日本的であってもちゃんとしたジャズになっている。川村さん、いまのニューハードでもこういう曲はレパートリーになっているんですか？

川村：はい。この曲は主要レパートリーのひとつで、この間のライヴでは本物の尺八でやってもらいました。最近はあまりやりませんが、ずっと学校公演、音楽鑑賞会をやっていまして、そのときの主要なレパートリーにも入っていました。

宮間：ごく最近ですが、横山さんのお弟子さんの……。

川村：横山勝也（注15）さんの門下生の菅原久仁義（注16）さんですね。

宮間：そう。彼とやったんですよ。いかにもニューハードらしい感じになってよかったです。

川村：それも六人の尺八で。

――尺八が六人ですか（笑）。すごいですね。ですから、ニューハードにはいろいろな顔があると思います。日本を代表するジャズ・オーケストラで、日本的情緒を湛えたジャズも演奏する。

宮間：日本的なものもわたしは大好きなんで、そういうものがニューハードで表現できたらいいと、これは結成した当初から思ってきたことです。

――それで七〇年代になりますと、佐藤允彦さんをはじめ、いろいろな方とのコラボレーションを実現させていきます。中でも佐藤さんとは一番多くアルバムを出していると思いますが、富樫雅彦（per）さんともア

（注15）横山勝也（尺八 1934～2010）東京音楽大学名誉教授、国際尺八研修館館長としても活躍した。67年に小澤征爾指揮のニューヨーク・フィルと武満徹作曲の〈ノヴェンバー・ステップス〉を演奏し、その後は世界各国のオーケストラと共演するなど国際的にも知られた。

（注16）菅原久仁義（尺八 1955年～）12歳より尺八を始め、都山流、琴古流を学ぶ。これまでにさまざまな賞を受賞し、世界各地で公演を開くなど、国際的な舞台でも活躍中。

ルバムを作られています。富樫さんとコラボレートされた『宮間利之とニューハード／牡羊座の詩』（日本コロムビア）（注17）、これも素晴らしいアルバムで、やっているのはほとんどフリー・ジャズです。

宮間：これは佐藤さんとのつき合いから生まれた作品です。このころはレコード会社もこういう音楽に理解があって、またファンの方々も支持してくださったので、ニューハードもそれに応えよう。そういう気持ちでやっていました。

――こういうことを日本のオーケストラがやるんだと、当時びっくりしたのと同時に感激もしました。このアルバムは五部構成の組曲になっていますが、その中から〈Ⅲの詩〉をお聴きください。

♪〈Ⅲの詩〉～『宮間利之とニューハード／牡羊座の詩』（日本コロムビア）

――これが七一年の録音で、その前の七〇年には佐藤允彦さんとのコラボレーションで『天秤座の詩』（日本コロムビア）が吹き込まれています。『天秤座の詩』は『スイングジャーナル』の「ジャズ・ディスク大賞／日本ジャズ賞」を受賞しました。いまお聴きいただいた『牡羊座の詩』も翌年の「日本ジャズ賞」を獲得していますから、このころはまさに破竹の勢い。それで『牡羊座の詩』のドラマーが豊住芳三郎（注18）さん。豊住さんはフリー・ジャズ系のドラマーですが、いわゆるビッグバンドのドラミングもやられていたんですか？

山木：やりますよ。前衛のああいうひとたちにも、もともとはちゃんとした基礎がありますから。基礎はばっちりやって、それからフリー・ジャズになる。

――このころはメンバーも面白くなってきたし、音楽も面白くなってきた。前向きな姿勢でいたオーケストラがニューハードだったと思いますが、ジャズの最前線にいる意識はあったんですか？

宮間：瀬川昌久さん（評論家＝オーケストラの権威）なんかはわたしたちのことをよくそういってくださいましたね。でもわたしはね、ジャズもさることながら、浅利慶太さんが日生劇場でバーンスタインの『ウエ

（注17）作・編曲でも優れた才能を示していた富樫雅彦（per）に依頼して完成させた5部構成の組曲。メンバー＝宮間利之とニューハード 富樫雅彦（drt）71年1月22日、27日 東京で録音

（注18）豊住芳三郎（ds 1943年～）67年にミッキー・カーティス（vo fl）のサムライでヨーロッパ・ツアー。69年の吉沢元治（b）トリオおよび高柳昌行（g）ニュー・ディレクションを経て、71年にシカゴの前衛ジャズ集団AACMに参加。その後は世界各地で内外のフリー・ジャズ系ミュージシャンと共演を重ねる。

スト・サイド物語』をやったとき（六八年）に音楽を担当させていただいたことが大きいと思っています。音楽的にはモダン・ジャズではなく、変拍子やらいろいろと入ったフルバンドの楽譜で、あれで本当の力がつきました。演奏家としてとてもいい勉強になりましたね。

——そういうこともやられていたんですか。当時のニューハードは歌謡曲の番組にも毎日のように出ていましたから、ぼくはふたつのニューハードがあるんじゃないかと思っていたんです。「テレビ班」と「ジャズ班」みたいなね（笑）。それぐらい八面六臂の大活躍でした。

宮間：バンドはひとつでした（笑）。でも小川さんが仰る通り、本当に忙しかったです。テレビはリハーサルやらなにやらで時間が取られます。しかも伴奏ですから最初から最後までつき合わなくてはいけない。移動をするにも大所帯ですからね。メンバーもたいへんでしたが、スタッフの貢献が大きかったです。

■世界の舞台に進出

——七〇年代半ばになると海外にも進出されます。七四年にはアメリカ西海岸の「モンタレー・ジャズ・フェスティヴァル」（注19）に出られました。

宮間：わたしどもにとって晴れ舞台でしたから、緊張と感激が一緒になって、その場では冷静でいられなかった。でもステージは楽しかったです。ゲストの方々も加わって、ジャズの楽しさや醍醐味を味わうことができました。それで帰国してからスリー・ブラインド・マイスの藤井武さんに「モンタレー」でやった曲をレコーディングしてもらいました（モンタレー出演記念盤『ニューハード』）。これもいい思い出です。

——それとは別に『宮間利之とニューハード／モンタレーのニューハード』（トリオ）（注20）というライヴ・アルバムがあります。今度はそこから一曲、ニューハードの代表的なレパートリーだったチャールス・ミンガス（b）の〈直立猿人〉を聴かせてください。

♪〈直立猿人〉～『宮間利之とニューハード／モンタレーのニューハード』（トリオ）

（注19）58年にカリフォルニアのラジオDJのジミー・ライオンズが始めたジャズ・フェスティヴァル。毎年9月に開催され、ライオンズの死去後も現在まで続けられている。

（注20）代表的なレパートリーを引っ提げ、ニューハードが最高の演奏を繰り広げる。最後の2曲では豪華ゲストも参加。メンバー＝宮間利之とニューハード ゲスト＝ディジー・ガレスピー（tp）ジョン・ファディス（tp）ジェローム・リチャードソン（ss）カル・ジェイダー（vib）モンゴ・サンタマリア（per）他 山木幸三郎 前田憲男 佐藤允彦（arr）74年9月20日、22日 ロサンジェルス「第17回モンタレー・ジャズ・フェスティヴァル」でライヴ録音

——〈直立猿人〉をビッグバンドでやったのにはびっくりしたんですが、初演は先ほど話に出た『パースペクティヴ』でした。アレンジは前田憲男さん。いまもこの曲はやられていますか？

川村：はい。これは十八番としてやらせていただいています。

——大ネタですものね。

川村：そうです。いつも演奏し終わると疲れ切ります（笑）。

——この曲は、直立猿人が人間になっていく姿をミンガスが音楽化したものです。ミンガスが来日したときもたしか共演されていました（注21）。ほかにも外国のアーティストとはいろいろと共演されています。

宮間：それもいい勉強になりました。海外の一流アーティストとご一緒できたことでニューハードのレヴェルが上がったんです。そういうチャンスがいただけたことに感謝しています。

——話は尽きませんが、そろそろ時間もなくなってきたのでもう一曲だけ聴かせてください。「モンタレー」の翌年、七五年に今度はニューヨークで開催された「ニューポート・ジャズ・フェスティヴァル」に出演して、これまた大反響を呼びます。このときはカウント・ベイシー（p）のオーケストラとのダブルビルで。

宮間：はい、一緒にやりました。ビッグバンドのお手本みたいなオーケストラですから、その方たちと同じステージに立てたというのが大感激で。

——場所が「ローズランド・ボールルーム」（注22）。あの有名なダンスホールですね。お客さんは踊っていたんですか。

宮間：ええ、ダンスもやっていました。

——もともと東京に出てダンスホールで演奏していたニューハードですから、本場の、それも最高のダンスホールで演奏ができて感慨もひとしおだったでしょうね。

山木：しかもカウント・ベイシーのバンドと並んで、二バンドで演奏したんです。

宮間：夢が実現しちゃって、あのときの幸せな気分は生涯忘れることができません。ニューハードをやっていて苦しいときもありましたが、やっていればいいこともある、そんな感激がありました。それで、ニュー

（注21）71年に来日した際のバックを務めたのがニューハードで、そのときのレパートリーをスタジオで録音したのが『チャールス・ミンガス／ミンガスとオーケストラ』（日本コロムビア）。メンバー＝チャールス・ミンガス（b）ボビー・ジョーンズ（ts）エディ・プレストン（tp）佐藤允彦（p）鈴木重男（as）宮間利之とニューハード ジャッキー・バイアード（arr）71年1月14日 東京で録音

（注22）19年にニューヨークの西51丁目にオープンし、56年に西52丁目に移転（2014年にクローズ）。30年代のスウィング・ジャズ時代は栄華を極めた。

ヨークにはその七五年に行って、二五年後の二〇〇〇年にもまた呼ばれたんですよ。

――そのときでビッグバンドを五〇年、現在では六〇年以上続けられている。いろいろな意味で本当にすごいと思います。

宮間：二〇〇〇年に呼ばれたとき、わたしは七九歳でした（笑）。

――いやあ、素晴らしいです。では最後に『宮間利之とニューハード／ニューハード・ライヴ・アット・ニューポート'75』（RCA）（注23）から聴かせていただきます。これも日本的な演奏ですが、〈土の音〉という曲。それを聴いて今日は終わりになります。宮間利之さん、アレンジャーの山木幸三郎さん、現在のコンサートマスターである川村裕司さん、本日はどうもありがとうございました。

宮間・山木・川村：ありがとうございました。

♪〈土の音〉～『宮間利之とニューハード／ニューハード・ライヴ・アット・ニューポート'75』（RCA）

2014-05-09 Interview with 宮間利之、山木幸三郎、川村裕司 @「天王洲スタジオ」for #237（2013.08.31. 放送）

（注23）『第22回ニューポート・ジャズ・フェスティヴァル』に出演した際に残されたライヴ盤。メンバー＝宮間利之とニューハード 山木幸三郎 前田憲男 佐藤允彦（arr）75年6月30日 ニューヨーク「ローズランド・ボールルーム」でライヴ録音